カントにおける「人間」

―「現象の形式」の問題―

森本　義裕

カントにおいて「人間」を考察する場合、哲学的な問題として、人間の形態（Gestalt）の問題をとりあげることができる。つまり、人間の形態（空間的輪郭）はカントの場合いかにして成立しているのか、ということである。なぜこのような問題を考えなければならないかと言えば、カントの場合、主観が形態を構成しているのであり、つまり主観が「人間」の形を形造っていると思われるからである。どのようにして構成するのかという具体的な問題については後にゆずることとして、まず今述べた点を「現象の形式」の問題を通して明らかにしてみたい。

一、現象の形式

「現象において私は、感覚に対応するものを現象の質料（Materie）と名づけるが、現象の多様を或る種の諸関係において秩序づけられ得るようにするものを私は現象の形式（Form）と名づける」（B 34）。この文章からわかることは、現象は質料（感覚）と形式とに分けて考えることができるということである。「私たちにはすべての現象の質料はア・ポステリオリにのみ与えられているが、しかし現象の形式は、質料のために総じてア・プリオリに心（Gemüt）の内にあらかじめ用意されている（bereitliegen）のでなければならず、したがってすべての感覚とは別個に考察され得るのでなければならない」（A 20, B 34）。このようにして、形式は質料とは関わりなくそれ自体で考察できるものであり、心の内にあらかじめ存しているものである。「この感性の純粋形式はまたそれ自身純粋直観と呼ばれるであろう」（A 20, B 34 f）。形式はまたそれ自体直観であり、したがって感覚は直観されることによって形式を与えられるのである。「もしも私が、物体（Körper）の表象から、悟性が物体について思考するもの、実体、力、分割可能性などを、同様に、物体において感覚に属するもの、不可入性、硬さ、色などを捨象したとしても、私にはこの経験的直観からなお或るものが、すなわち、拡がり（Ausdehnung）と形態（Gestalt）が残存する。この拡がりと形態は純粋直観に属し、純粋直観は感官あるいは感覚の現実的対象なしですら、感性の単なる形式として心の内にア・プリオリに生じるのである」（A 20 f, B 35）。

この文章からわかるように、拡がりと形態は純粋直観に、すなわち形式の側に属する（gehören）のであって、質料とは全く関わりがない。そして純粋直観は感官や感覚の対象がなくとも心の内にア・プリオリに生じるのである。したがって、たとえば机という物体の形態は感覚なしにも心の内に生じ得るのであって、その形態が感覚と合一することによって現実の机が生じるのである。

さて、以上に述べたところから、物体にかぎらず、人間の形態も心の内にあらかじめ用意されてある（bereitliegen）と考えることができるであろう。否、人間をも含めて形あるものはすべてそうである。それらの形態は純粋直観が構成しているものであるから、主観が構成していると言いかえることもできるであろう。運動や成長などの形態の変化も、主観が自然の内に投げ入れている（hineinlegen）と考えることができる。ではこのような事態は具体的にはどのようにして可能であるとカントは考えているのであろうか。

二、自　我

カントは純粋統覚について次のように述べている。「私が、諸表象一般の多様なものの超越論的綜合において、したがって統覚の綜合的統一において私自身を意識するのは、私が私に現象するとおりに意識するのでもなければ、私が私自体そのものであるとおりに意識するのでもなく、私が存在するということだけを意識するのである。この表象は思考であって、直観ではない」（B 157）。純粋統覚は自己意識であるが、この意識とはすなわち思考であり直観ではない。

カントはまた純粋統覚について次のように語っている。「思考する自我は、自己自身を直観する自我（というのは、私はなお他の直観様式を少なくとも可能なものとして表象し得るから）と区別されながら、しかも後者の自我と同一主観として同種である（als dasselbe Subjekt einerlei）のはいかにしてか、それゆえ、英知体および思考する主観としての自我は、私が思考されたものであること以上におのれに対して直観において与えられており、しかも他のフェノメノンと等しく、私が悟性にとって存在するとおりにではなく、私がおのれに現象するとおりに直観において与えられているかぎりにおいて、私自身を思考された客観として認識すると、私が言うことができるのはいかにしてか、という問題は、私が私自身にとって総じて一つの客観であることができ、しかも直観と内的知覚の客観であることができるのはいかにしてなのかという問題と同じだけの困難を伴なっている」（B 155f）。この文章を要約すると次のようになる。思考する自我（純粋統覚）は自己自身を直観する自我（Ich, das sich selbst anschaut）と根本において同一物であるが、しかし私たちには自我は内的直観の対象すなわち現象として直観されるのみである。つまり、「思考」ということに関して純粋統覚は、根本にある「自己自身を直観する自我」と共通であるが、後者においては思考＝直観であるのに対して、前者では思考と直観が分離されており、前者はそれ自身思考であるにもかかわらず自己を思考された客観として認識するため

には内的直観を必要とするのである。そしてこのような事態は困難な謎である。

純粋統覚は単なる思考であるが、それだけではない。人間は感性的な存在者であると同時に理性的な存在者（英知体）でもあり、それによって英知界との何らかの関わりを持つ者である。純粋統覚は英知界においては直観的思考であり、自己を思考すると同時に直観しているものであるが、感性界においてそれが単なる思考として残存していると考えることができる。そのように考えれば「同一主観である」ということが理解できるであろう。ここに述べたことを論証することはできないが、一つの仮説によって具体化することはできる。次に、「現象の形式」の問題と合わせてこの具体化を考えたい。

三、魂と生産的構想力

「諸現象と単にその形式に関する私たちの悟性の図式機能（Schematismus）は、人間の魂の深みにおける隠された技術（verborgene kunst）であり、その技術の真の手練（Handgriff）を私たちが自然からいつか看破し、眼前に明らさまにすることは困難であろう」（A141, B180f）。この文章はたいへん意味深長であり解し難いが、まず三つの要素に分解することができる。A、現象の形式は悟性の図式機能によって規定される。B、その悟性の図式機能は私たちの魂（Seele）の深み（Tiefe）における隠された技術である。C、その技術の真の手練を私たちは（魂の深みにおいてはもとよりのこと）自然（Natur）からも看破する（abraten）ことは困難である。この三つの内、AとBを考察すればCはおのずから解けるものである。

「悟性の図式機能」の一例としてカントは次のように述べている。「犬についての概念は、私の構想力がそれにしたがって或る四足の動物の形態を、経験が私に提示する何らかの唯一の特殊な形態や、あるいはまた私が具体的に描写する（darstellen）ことができるあらゆる可能的な形象（Bild）に制限されることなく、普遍的に描くことができる（allgemein verzeichnen können）一つの規則を意味する」（A141, B180）。「犬についての概念」という場合の「概念」については論及しないが、ここでは「図式」と同義であると考えてさしつかえない（1）。それよりも、この文章で重要なのは構想力の働きである。この文章中の構想力は「或る四足の動物の形態を、経験が私に提示する何らかの唯一の形態や、私が具体的に描写することができるあらゆる可能的な形象に制限されることなく、普遍的に描く」ものであるが、これは生産的構想力に他ならない。なぜなら、この構想力は私たちが外的に経験してきた、あるいは内的に表象し得る全形態を超えて描くからである。すなわち、私たちの知らない形態さえ描くのであり、それが再生産的活動でないことは言うまでもない。そしてこの「犬」の例をカントは「魂の深みにおける悟性の図式機能」であるとまぎれもなく考えているのであるが、そうであるならば、魂の内に現象の形式がすでに存しているということになる。悟性の図式機能は、現象の形式に関するものであると言われていたからである。ところで、

先に「現象の形式」を考察した際、現象の形式は感覚とは関わりなく「心」の内にあらかじめ用意されていると言われていた。ペイトンによれば、「心」(Gemüt)は colourless な表現であり、「魂」(Seele)という形而上学的色彩を持つ表現を避けるためにカントは「心」を用いている。すなわち心と魂は同義であるとペイトンは言うのである(2)。スミスもまた同じことを述べている(3)。もしそうであるならば、魂が現象の形式を規定しているということになるであろう。純粋直観は心の内にア・プリオリに生じると言われていたが、言いかえれば魂の内に純粋直観は生じるのでありその純粋直観が現象の形式なのである。純粋直観の内には拡がりや形態が存するが、形態は魂が図式にしたがって生産的構想力によって描き出すのである。「形象は生産的構想力の経験的能力の産物である」(A141, B181)と言われるように、魂は生産的構想力の経験的能力によって自らの生み出した形態を感覚に当てはめ、現実の具体的な形象を生み出すのである。このような操作を魂は自己自身に対しても行なっており、自己を身体にしばりつける。すなわち人間は魂と身体との合一体であるが、これによって魂は自己直観を失い、魂の自我は単なる思考として残存してしまう(純粋統覚)。なぜなら魂は、自己を身体にしばりつける際、時間と空間という感性的直観の背後に姿を隠してしまうからである。したがって魂は、それ自身としては自己直観を持つが、人間としては自己直観を失う。したがって人間は経験とともに認識を開始するのであり、魂としての自己が自然の内に投げ入れた諸形態(犬や他人などの)を見ても、自分が投げ入れているとは気づかず、生まれて初めて見たように思うのである。したがって人間は、魂の深みに隠された技術の手練を自然から看破することはできない。

ここに述べた仮説は、仮説としても多くの不備を持っているが、これを補うためには、深い形而上学的思索を要する。すなわち、カントを形而上学的に考え直す必要があるということである。

注

※カントからの引用は、すべて『純粋理性批判』からのものであり、慣例にしたがい、第一版をA、第二版をBとして頁数を示した。また、引用文中の傍点は原文でゲシュペルトになっている部分を示している。

(1) ここでの「概念」は純粋悟性概念ではなく、カントが「純粋感性概念」と呼ぶものである(A140, B180を参照されたい)。したがって、「図式」も純粋悟性概念の図式ではない。概念と図式は全く同じではないが、ここの文脈ではそう考えてよいということである。

(2) H.J.Paton : Kant's Metaphysic of Experience, vol.1, p. 95, note 4.

(3) N.K. Smith : A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason", 2 nd ed. p. 81.

(もりもと・よしひろ　筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)